

巻 頭 言

「まなびあい」という羅針盤

コミュニティ福祉学会運営委員長

コミュニティ福祉学部学部長

沼澤 秀雄

東京オリンピック・パラリンピックが新型コロナウイルス感染症の拡大の最中、無観客で開催されました。医療関係者の方々の1年以上にもわたる懸命な努力にも関わらず、毎日1万5千人以上の国内感染者が見つかり、緊急事態宣言が多くの都道府県に出されていたなかでの開催でした。8年前の国際オリンピック委員会の総会で東京開催が決定した当時には、「もう一度オリンピックを観るまでは頑張って生きていこうと思う。」という高齢者の会話が聞こえてきました。我々のような福祉やスポーツに携わる者としては、このような世界中が注目するスポーツイベントが、たくさんの人たちの支えや励ましになっているのだと感じた瞬間となり、とても嬉しかったことを覚えています。はたして2021年の東京オリンピック・パラリンピックは楽しみにしていた、たくさんの方々を満足させるものだったのでしょうか。本来であれば、選手や観客の安心安全を守る立場の医療関係者とスポーツの関係者、選手を応援する人たちが心一つにして大会を盛り上げていくことができれば良かったのですが、そうならなかったことが残念でなりません。しかしながら、救いとなったのは選手達と運営を支援したボランティアの皆さんの活躍だったと思います。悲喜こもごものドラマティックな勝負があり、選手たちは素晴らしいパフォーマンスを残してくれました。本学部では、2014年卒業の澤田優蘭さんがパラリンピックにおいて新種目のユニバーサルリレーで銅メダルを獲得しました。またスポーツウエルネス学科のカトリン先生と後関先生は、それぞれオーストリアと日本選手団のサポートをされました。このような状況のなかでも大会を中止することなく開催されたことについては、これから様々な検証が行われ評価されるのではないかと思います。

さて、「まなびあい」に話を移したいと思います。2007年に学部の10周年記念事業として、コミュニティ福祉学会「まなびあい」が設立されて以来、本学部は在学生、卒業生、教職員による自由な学びと交流の場として、年に1回の年次大会と学会誌発行、研究実践奨励賞の授与などを実施しています。学部の教育を船の航海に例え

れば、在學生は年間を通して取り組んできた研究発表の機会を、大学院生は論文につながるような研究発表の機会を得ること、そして卒業生はそれぞれの職場でどのような課題を持ちながら仕事をしているのかについて報告することを「まなびあい」という場で行います。学習あるいは研究と現場の実践をつなぎ、まだ就職していない在學生はこの「まなびあい」に参加することによって「自分が就きたい仕事とは何か」を考え刺激を受けることとなります。学術的な論文を書いて研究者になろうと思っていない人でも、研究発表を聴いて興味を持った内容に関わる仕事につくことがあるかもしれません。また、コミ福を卒業して各分野で活躍しているOB/OGの活動報告を聴いて就職先を考えることになるかもしれません。したがって、大げさに言えば、このコミ福のユニークなコミュニティである「まなびあい」は、参加者にとって将来の進むべき方向を示してくれる人生の道標（羅針盤）になるようなイベントになっているのではないかと思います。さらには「まなびあい」が池袋キャンパスで行なわれているホームカミングデイのような意味合いを兼ね備えているのかもしれません。もっと気軽にいつでもコミ福に帰ってきて話ができて、また、日々の生活に戻っていくといった非日常のお祭りのようなイベントとして位置付けるのも良いのかもしれません。

昨年、同じように新型コロナウイルス感染症の影響で開催が危ぶまれた年次大会でしたが、オンラインでの開催によって「学びの継続」が守られました。そればかりか、実行委員会の努力もあって例年以上の参加者を集め、シンポジウム、研究発表などを大きなトラブルもなく実施することができました。今年度、未だに緊急事態宣言が続いている状況ですが、運営委員長の石井秀幸先生のリーダーシップのもと、学部をあげてこの「まなびあい」に臨みたいと思っています。今年は昨年以上にたくさんの研究発表がエントリーされました。年齢や立ち場を越えたコミ福の仲間が集い、活発な議論がオンライン上で繰り広げられるような大会になることを期待しています。